

SHOW HEY シネマール4

★★★★★

屋根裏部屋のマリアたち

2010年・フランス映画
配給/アルバトロス・フィルム・106分

2012 (平成24) 年6月14日鑑賞

GAGA試写室

Data

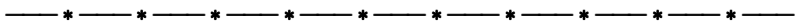
監督・脚本：フィリップ・ル・ゲイ
共同脚本：ジェローム・トネール
出演：ファブリス・ルキーニ/サン
ドリーヌ・キベルラン/ナタ
リア・ヴェルベケ/カルメ
ン・マウラ/ロラ・ドゥエニ
ヤス/ベルタ・オヘア/ヌリ
ア・ソレ/コンチャ・ガラン
/マリー=アルメル・ドゥギ
ー/ミュリエル・ソルヴェ/
オドレイ・フルーロ/アニ
ー・メルシエ

👁️👁️ みどころ

『ヘルプ ～心がつなぐストーリー～』（11年）は1960年代初頭のア
メリカにおける黒人メイド問題を扱ったが、本作では同じ時代のフランスにス
ペイン人メイドが大量に登場！証券会社の社長=ブルジョアジーである雇い主
が、ある日彼女らが暮らす6階屋根裏部屋に行ってみると・・・。

本作のテーマはズバリ「変化」。人間は50歳を超えてからでもより高い価
値を発見できるもの！それまでの人生観を大きく変えられるもの！そんなこ
とをユーモアたっぷり教えてくれる本作に拍手！

さあ、あなたも勇気を持って、明日と言わず今日から自分自身の変革を！



■時代背景とブルジョア男の意味をしっかりと！■

本作の時代と舞台は、1962年のパリ。当時の日本は「60
年安保闘争」を経て高度経済成長への歩みを始めていたが、当時
のフランスは？また、スペインは？

「スペイン内乱」後のスペインでは、1939年から1975
年までフランコ将軍による軍事独裁政権が36年間続いた。第2
次世界大戦中フランコは「中立国の指導者」という立場をとりな
がら実は親ナチスだったから、連合国が枢軸国に勝利した後は居
心地が悪かったはず。しかし、第2次世界大戦後の「東西冷戦」
の激化により、西側諸国は反共産主義という共通点を持つフラン
コ政権との関係を少しずつ修復し、1959年のアイゼンハワー
大統領との会見によってスペインとアメリカの関係は大きく改善



『屋根裏部屋のマリアたち』
発売/販売：アルバトロス 税込価格：3,990円
©Verane Production-France©Cinéma-90 All rights reserved

した。しかし、フランコ政権下で疲弊しきった人々は仕事と自由を求めて次々と隣国フランスへ押し寄せたため、1962年当時のフランスではスペインからの移民問題が大きな社会問題になっていた。

他方、今や日本ではブルジョアジーVSプロレタリアートという言葉は死語になってしまったが、1962年当時のフランスで先代から続く証券会社の経営者をしているジャン＝ルイ・ジュベール（ファブリス・ルキーニ）は完全なブルジョアジー。また、日本ではアパートは安物、マンションは高級と相場が決まっているが、1962年のフランスではブルジョアジーのジャン＝ルイが住むのがアパートマンだ。都市問題をライフワークにしている私には、本作でこのアパートマン全体の構造や使用方法が示されなかったのが残念だが、その6階は屋根裏部屋となっており、そこに約10名のスペイン人メイドたちが生活しているらしい。したがって、本作を鑑賞するにあたっては、まずそんな時代背景とブルジョアジーの意味をしっかりと！

■□「マリアたち」の意味をしっかりと！■□

邦題の『屋根裏部屋のマリアたち』の「マリア」は、ジャン＝ルイの家にメイドとして雇われてきたスペイン人メイド、マリア（ナタリア・ヴェルベケ）のことだが、「マリアたち」とはジャン＝ルイが住むアパートマン6階の屋根裏部屋に住む多くのスペイン人メイドたちのこと。本作では主人公ジャン＝ルイの「変化」が大きなテーマだが、その「変化」を支えたたくさんのマリアたちの個性に注目！



『屋根裏部屋のマリアたち』

発売/販売：アルバトロス 税込価格：3,990円

©Vendôme Production-France2Cinema-SND All rights reserved.

まずジャン＝ルイの母親が亡くなった後、その部屋を改装するという妻シュザンヌ（サンドリーヌ・キベルラン）に叛旗を翻したのが、ジュベール家に長年仕えてきたメイドのジェルメーヌ（ミシェル・グレイゼル）。「奥様は母親失格です」とまでタンカを切ってしまうが、クビもやむ無し。仕方なくジェルメーヌは故郷のブルターニュ地方に戻るようになったが、それでもあくまで陽気なところが、さすがスペイン人！次に、マリアが頼ってやって来たのが、長くパリでメイドとして働いている叔母コンセプション（カルメン・マウラ）。彼女の夢はパリでお金を貯めて夫の待つスペインに豪邸を建てることだが、さてその夢の実現は？その他、信仰心に厚い陽気な感激屋ドロレス（ベルタ・オヘア）、フランコ政権下の内戦で家族を失い、パリに逃げしてきた共産主義者のカルメン（ロラ・ドゥエニャス）、フランス人男性との玉の輿結婚を夢見る若きメイド、テレサ（ヌリア・ソレ）など、6階に住むメイドたちはそれぞれ強烈な個性を発揮しているうえ、信仰心に厚く、スペイ

ン人としての連帯感もバッチリ。

チョン・ドヨンが主演した韓国映画『ハウスメイド』（10年）は「復讐」をキーワードとしたドロドロしたご主人とメイドとの内幕が描かれた（『シネマルーム27』67頁参照）のに対し、同じメイドをテーマにしても、フランス映画の本作はあくまで陽気な人生賛歌となっている。本作を鑑賞するにあたっては、そんな「マリアたち」の意味をしっかりと！

■黒人メイドの取材は大変だったが、ご主人様なら・・・■

2012年第84回アカデミー賞で、1人が主演女優賞に、2人が助演女優賞にノミネートされ、オクタヴィア・スペンサーが助演女優賞を獲得した映画が『ヘルプ〜心がつなぐストーリー〜』（11年）だった。そこでは、1960年代初頭に大学を卒業し作家を夢見る若きヒロインが、コラムを書くため黒人メイドたちの生態を調査する中で意外な壁に突き当たり、悪戦苦闘しながら成長していく姿が生き生きと描かれていた（『シネマルーム28』42頁参照）。時代は本作と同じく1960年代初頭だが、当時のアメリカは庭付き一戸建て、ガレージ付き、トイレは全て水洗だから、フランスよりよほど豊かだったようだ。また、黒人メイドに同じトイレを使わせれば悪い病気がうつるという言葉がまかり通っていたくらいだから、黒人差別はもとより、雇い主とメイドの身分・立場の違いは明確だった。

それはフランスでも同じだが、ある日シュザンヌから使わなくなった母親の家具を6階の物置部屋に運ぶよう頼まれたジャン＝ルイが6階の屋根裏部屋に登り、メイドたちの生活の実態を覗いたことがきっかけに、本作のストーリーが展開することになる。6階の各部屋には洗面所がないため、共通の洗面所から洗面器に水を汲んで自分の部屋で顔を洗っているらしい。また6階のトイレは一応水洗だが、故障で水が流れなくなっていたから大変。そんな、トイレの実態を目の当たりにしたジャン＝ルイは早速、配管工を呼び修理してくれたから、メイドたちはジャン＝ルイに拍手喝采を！さらに、妹の出産の経過を知らせる手紙が届かないと半狂乱になっているドロレスのために国際電話をかけてやったジャン＝ルイは、彼女から「聖人です」と褒めそやされ、鼻高々に。

アメリカではヒロインによる黒人メイドの取材が大変だったようだが、こちらはご主人さまの判断ひとつで何でもできる。そんなご主人とめぐり会えた屋根裏部屋のスペイン人メイドたちは超ラッキー。ここからジャン＝ルイとマリアたちとの交流が広がっていったが、そんなジャン＝ルイの「変化」を妻のシュザンヌと久しぶりに週末寄宿舎から帰宅した2人の息子たちは、いかに観察し、どのように感じたの？

■この変化はなぜ？そのテーマをじっくりと！■

私が思うに、本作のテーマはズバリ変化！人間50歳を過ぎてしまうと人生観は固まり、それ以上の「変化」はないと思いがち。まして、1960年代初頭パリのブルジョアジーだったジャン＝ルイは、よほどのことがなければ死ぬまで一家の主として君臨し、前の主人のやり方を踏襲する人生だったはずだ。ところが、その「よほどのこと」が6階の屋根裏部屋で起きたことによって、ジャン＝ルイの人生観に大きな変化が・・・。

変化の第1は、金を稼ぐ楽しさ以上に人を喜ばせる楽しさを知ったこと。スペイン人メイドたちのちょっとした願いを聞き入れることなど、ジャン＝ルイにとってはたやすいこと。それをしてだけで、こんなに自分の気持ちが豊かになるとは・・・。第2は、スペイン人メイドたちを通してフランス人上流社会の儀礼的な



『屋根裏部屋のマリアたち』

発売/販売：アルバトロス 税込価格：3,990円

©Vendome Production-France2Cinema-SND All rights reserved.

付き合いのくだらなさ、本音のぶつかり合いの楽しさを知ったこと。多少行儀が悪くても、こんな楽しさを知ったらもう・・・。第3は、自分でも気付かないうちに、あるいはちょっとしたタイミングで入浴中のマリアのヌード姿を目撃したことによって（?）、妻のシュザンヌを愛しつつマリアへの恋心がいつの間にか芽生えて（?）、それが人生の楽しみになっていたこと。妻のシュザンヌはジャン＝ルイの顧客である資産家の未亡人ベッティーナ夫人（オドレイ・フルーロ）と夫の仲を疑っていたが、ジャン＝ルイはベッティーナ夫人に対してその手の興味は全く無く、関心は専らスペイン人メイドたち、とりわけ、マリアだった。

フランス映画は、この手の心理をユーモアたっぷりに描くのが大の得意。『アーティスト』（11年）『シネマルーム28』（10頁参照）や『最強のふたり』（11年）に見られる近時のフランス映画の好調さの中、『キネマ旬報』7月上旬号は「検証：フランス映画のいま」を特集しているが、これを併せて読めばフランス映画の奥深さ、そして本作のテーマであるジャン＝ルイの「変化」の面白さがより理解できるのでは・・・。

■□こんな誤解も、悪くない・・・？■□

ジャン＝ルイがスペイン人メイドたちにしてやったことは前述以外にもたくさんあったが、大きいものはメイド仲間のピラール（コンチャ・ガラン）が暴力夫に悩まされていることを知るや、知り合いのアパルトマンの管理人に推薦してやったこと。そのため、ジャン＝ルイはピラールの管理人就任パーティーに招かれることになったのだが、これが楽しいの何のって・・・。ブルジョアジーとしてこれまでさんざん遊んできたはず（?）のジャン＝ルイですら、こんな楽しさはかつて知らないものだった。

さらに、ジャン＝ルイを喜ばせたのはマリアから「訂正します。あなたは特別な雇い主よ」と告げられ、頬にキスまでされたこと。実は、妻のシュザンヌが開催したパーティーの席で、マリアに言い寄っていた雇われ給仕人に毅然とした態度を取れないマリアを見て嫉妬し八つ当たりしてしまったジャン＝ルイは、マリアから「所詮、あなたもただの主人。とりわけタチが悪い」と言われ、大きなショックを受けていたから、今日は久々の逆転満

墨ホームラン！

ところが、ジャン＝ルイが上機嫌で家に戻ってくると、夫が魔性の女ベッティーナ夫人と浮気していると思ひ込んだ妻シュザンヌから「家を出て行って！」ときつい一言を。これにてジャン＝ルイは6階屋根裏の物置部屋で一人暮らしを始めることになったのだが、これが意外と快適！「はじめて、1人になった。今やっと自由に」ジャン＝ルイは心からそう思っていた。そうすると、シュザンヌの誤解も悪くない・・・？

■□■ベッドインはハプニング？それとも必然？■□■

屋敷から追い出されたジャン＝ルイはどこに住んでいるの？妻シュザンヌは内心それを気にしていたが、外見上はあくまで強気。他方、家庭から解放された(?)ジャン＝ルイは、訪問してきた息子たちから家に戻るように言われると、逆に「ここで見つけたんだ、家族を。人は真の友を探すべきだ」とその心境を披露。

私の中国語の勉強と同じようにジャン＝ルイのスペイン語の勉強は熱が入り、今や6階屋根裏部屋のスペイン人メイドたちは彼にとって家族同様。中でもマリアとは・・・。すると、この先ジャン＝ルイとマリアの仲はどのように？マリアの叔母コンセプションがそれを心配したのも当然だろう。一見何の屈託もなく異国フランスでのメイド生活に精を出しているマリアだったが、実はマリアにはある重大な秘密があった。それがどんなものかは、あなた自身の目で確認してもらいたいが、ジャン＝ルイに対してそんな重大な秘密を告白できる仲になれば、それは年の差や身分の違いを超えた、本物の男女の仲？フランス映画は「ロミオとジュリエット」ばりの純愛もの以上に奥深い大人の恋を描くのが得意だから、このままいけば2人のベッドインはあるの？あるとしたら、それはハプニング？それとも必然？

■□■意外な結末は？3年後の人生模様は？■□■

ジャン＝ルイの価値観の変化、人生観の変化はマリアとの仲を確認していく(?)につれ、より確固たるものになっていった。その結果としての大きな決断の1つが、祖父の代から続いてきた証券会社の社長の座の譲渡。周りから見ればこれは大変な決断だが、本人にとっては意外に軽い決断だったらしい。ジャン＝ルイにとってホントに重い決断は、外見はともかく内心ではジャン＝ルイの帰りを待っている妻シュザンヌをとるのか？それともマリアとの新生活をとるのか？の選択。ジャン＝ルイの腹は決まっているようだが、さてシュザンヌは？そして、大きな秘密をジャン＝ルイに打ち明けたマリアの決断は？

この点、観客はその結末を早く知りたいが、映画とは便利な芸術。ラストに向けて時間は一瞬の間に3年が経過。今やスペイン語を自由にしゃべれるようになったジャン＝ルイは、車に乗って1人スペインのある村を訪れていた。そして、そこには念願の豪邸を建てたマリアの叔母コンセプションがいたが、その夫は？そしてマリアは？

そこでジャン＝ルイに告げられた意外な結末とは？そんな意外な3年後の人生模様は、あなた自身の目でしっかりと・・・。

2012(平成24)年6月19日記